

にぎりえ

樋口一葉

青空文庫

おい木村さんきむら信さんしん寄つてお出よ、お寄りといつたら寄つても宜い
 ではないか、又素通りまたすどほで二葉ふたばやへ行く氣きだらう、押おしかけて行つ
 て引ひきずつて來るからさう思おもひな、ほんとにお湯ぶうなら歸かへりに吃きつ度よ
 つてお呉くれよ、嘘うそつ吐つきだから何なにを言いふか知しれやしないと店みせ先さき
 に立たつて馴染なじみらしき突つかけ下駄げたの男をとこをとらへて小言こごとをいふやうな
 物の言いひぶり、腹はらも立たたずか言い譯わけしながら後刻のちに後刻のちにと行ゆきす
 過ぎるあとを、一寸ちよつと舌打したうちしながら見送みおくつて後のちにも無ないもんだ
 來くる氣きもない癖くせに、本當ほんとうに女房にようぼうもちに成なつては仕方しかたがない

ねと店みせに向つて鬩むかをまたぎながら一人言ひとりごとをいへば、高たかちやんだ
分御述いぶこじつくわい懐なだね、何もそんなに案あんじるにも及およぶまい焼棒やけぼつくい杓なと何
とやら、又またよりの戻もとる事こともあるよ、心配しんぱいしないで呪まじなひでもして待ま
つが宜いいいさと慰なぐさめるやうな朋輩ほうばいの口振くちぶり、力りきちやんと違ちがつて
私わたししには技倆うでが無ないからね、一人ひとりでも逃にがしては殘念ざんねんさ、私わたしの
やうな運うんの悪わるい者ものには呪まじなひも何も聞ききはしない、今夜こんやも又また木戸番またぎどばん
か、何なんたら事ことだ面白おもしろくもないと肝癩かんしやくまぎれに店前みせさきへ腰こしを
かけて駒下駄こまげたのうしろでとんくと土間どまを蹴けるは二十の上うへを七つ
か十か引眉毛ひきまゆげに作り生際つくはへぎは、白粉おしろいべつたりとつけて唇くちびるは人喰ひとく
ふ犬いぬの如ごとく、かくては紅べにも厭いやらしき物ものなり、お力りきと呼ばよれたる
は中肉ちうにくの背せい恰好かつかうすらりつとして洗あらひ髪がみの大嶋田おほしまだに新しんわらの

さわやかさ、ゑり頸もと計ばかりの白粉おしろいも榮はえなく見みゆる天然てんねんの色いろ白しろ
 をこれみよがしに乳ちのあたりまで胸むねくつろげて、たばこ烟草すばく長な
がぎせるがぎせるに立たて膝ひざの無作法ぶさはうさも咎とがめる人ひいのなきこそよけれ、おも思きひ切
おほがたつたる大形おほがたの裕衣ゆかたに引ひかけ帯おびは黒くろ縹じゆす子なと何なにやらのまがひ物、
ひひら緋ひの平ひらぐけが背せの處ところに見みえて言いはずと知しれし此このあたりの姉あねさま風ふう
たかなり、お高たかといへるは洋銀ようぎんの簪かんざしで天神てんじんがへしの鬚まげの下したを搔かき
おもながら思おもひ出だしたやうに力りきちやん先刻さつきの手紙てがみお出だしかといふ、は
きあと氣きのない返事へんじをして、どうで來くるのでは無ないけれど、あれも
あいさうお愛あい想さうさと笑わらつて居ゐるに、たいてい大底たいていにおしよ卷紙まきがみ 一一ふたひろ尋もも書かい
まいぎつてて二枚切手まいぎつての大封おほふうじがお愛あいさう想さうで出で來きる物ものかな、そして彼あの人ひと
あかさかからは赤坂あかさか以來かの馴染なじみではないか、すこ少しすこやそつとの紛雜いざがあろうとも

縁切れになつて溜る物か、お前の出かた一つで何うでもなるに、ちつとは精を出して取止めるやうに心がけたら宜かる、あんまり冥利がよくあるまいと言へば御親切に有がたう、御異見は承り置まして私はどうも彼んな奴は虫が好かないから、無き縁とあきらめて下さいと人事のやうにいへば、あきれたものだのと笑つてお前などは其我まゝが通るから豪勢さ、此身になつては仕方がないと團扇を取つて足元をあふぎながら、昔しは花よの言ひなし可笑しく、表を通る男を見かけて寄つてお出でと夕ぐれのみせき

店先にぎはひぬ。

店は二間間口の二階作り、軒には御神燈さげて盛り鹽景氣よく、空壇か何か知らず、銘酒あまた棚の上にならべて帳場めき

たる處もみゆ、かつてもと勝手元には七輪りんを煽あほく音折おとをり々に騒さわがしく、女
るじて主が手づから寄せ鍋茶なべちやわん椀ぐらいむし位はなるも道理ことわり、表おもてにかゝげし
かんぼん看板みを見れば子細しさいらしく御料理おんりようりとぞしたゝめける、さりとて
しだ仕出し頼たのみに行たらば何なにとかいふらん、俄にはかに今日品切れこんにちしなきもをか
しかるべく、女をんなならぬお客きやくさま様は手前店てまへみせへお出かけを願ねがひま
するとも言いふにかたからん、世よは御方便ごほうべんや商しょうばい買かがらを心こころ
ゑ得くちとて口取りやきざかな焼肴とあつらへとあつらへに來くる田舎いなかものもあらざりき、
りきお力このやといふは此家まいかんぼんの一枚看板とし、年わかは随ずい一若わかけれども客きやくを呼よぶに
めう妙ありて、さのみは愛想あいさうの嬉うれしがらせを言いふやうにもなく我わがまゝ
しごく至極ふるまいの身すこの振舞きりよう、少おもし容貌こづらの自慢にかと思おもへば小面こづらが憎にくいと
かげぐち蔭はうばい口つきあついふ朋輩ぞんもありけれど、交際ほか際ところては存とこの外とこやさしい處ところがあ

つて女ながらも離れともない心持がする、あゝ心とて仕方のないもの面ざしが何處となく冴へて見へるは彼の子の本性が現はれるのであらう、誰しも新開へ這入るほどの者で菊の井のお力を知らぬはあるまじ、菊の井のお力か、お力の菊の井か、さても近來生まれの拾ひもの、あの娘のお蔭で新開の光りが添はつた、抱へ主は神棚へさゝげて置いても宜いとて軒並びの羨やみ種になりぬ。

お高は往來の人のなきを見て、力ちやんお前の事だから何があつたからとて氣にしても居まいけれど、私は身につまさされて源さんの事が思はれる、夫は今の身分に落ぶれては根つから宜いお客ではないけれども思ひ合ふたからには仕方がない、年が違をが子が

ありがさ、ねへ左様ではないか、お内儀さんがあるといつて別れ
 られる物かね、構ふ事はない呼出してお遣り、私しのなぞといつ
 たら野郎が根から心替りがして顔を見てさへ逃げ出すのだから
 仕方がない、どうで諦め物で別口へかゝるのだがお前のは夫
 れとは違ふ、了簡一つでは今のお内儀さんに三下り半をも遣
 られるのだけれど、お前は氣位が高いから源さんと一處になら
 うとは思ふまい、夫だもの猶の事呼ぶ分に子細があるものか、手
 紙をお書き今に三河やの御用聞きが来るだろうから彼の子僧に使
 ひやさんを爲せるが宜い、何の人お嬢様ではあるまいし御
 遠慮計申てなる物かな、お前は思ひ切りが宜すぎるからいけ
 ない兎も角手紙をやつて御覽、源さんも可愛さうだわなと言ひな

がらお力りきを見ればみ烟管掃除きせるそうじに餘念よねんのなきは俯向うつむきたるまゝ物ものいはず。

やがて雁首がんくびを奇麗きれいに拭ふいて一服ぷくすつてポンとはたき、又またすいつけてお高たかに渡わたしながら氣きをつけてお呉くれ店先みせさきで言いはれると人聞ひとぎきか悪いわるではないか、菊きくの井ゐのお力は土方どかたの手傳てつだひを情夫まぶに持もつなど、考違かんちがへをされてもならない、夫それは昔むかしの夢ゆめがたりさ、何なんの今いまは忘わすれて仕舞しまつて源げんとも七おもとも思おもひ出だされぬ、もう其話そのはなしは止やめくといひながら立たちあがる時表ときもてとほを通へこおびる兵兒帶へいごおびの一よむれ、これいしかは石川いしかはさん村岡むらおかさんお力の店りきみせをお忘わすれなされたかと呼よべば、いや相變あひかはらず豪傑ごうけつの聲こゑかゝり、素通すどほりもなるまいとてずつと這は入いるに、忽たちまち廊下らうかにばたくといふ足あしおと、姉ねへさんお銚子てうしと聲こゑを

かければ、お着さかなは何なにをと答こたふ。三味さみの音景ねけい氣きよく聞きこえて亂舞らんぶの足あ
しおと音おとこれよりぞ聞きこえ初そめぬ。

二

さる雨あめの日ひのつれ／＼に表おもてを通とほる山やまだ高帽かぼう子しの三十男をとこ、あれな
 りと捉とらずんは此降このふりに客きやくの足あしとまるまじとお力りきかけ出だして袂たもとに
 すがり、何どうでも遣やりませぬと駄だ々々をこねれば、容きり貌ようよき身みの
 一徳とく、例れいになき子細しさいらしき客きやくを呼よび入れて二階かいの六疊ぢように三味線さみせんな
 しのしめやかなる物ものがたり語とし、年としを問とはれて名なを問とはれて其次そのつぎは
 親おやもとの調しらべ、士族しぞくかといへば夫それは言いはれませぬといふ、平へいみ

民かんと問とへば何どうござんしようかと答こたふ、そんなら華族くわぞくと笑わら
 ひながら聞きくに、まあ左様さうおもふて居ゐて下くだされ、お華族くわぞくの姫ひいさ
 様まが手てづからのお酌しやく、かたじけなく御受おうけなされとて波々なみくと
 つぐに、さりとは無作法ぶさほうな置おきつぎといふが有ある物ものか、夫それは小をがさ
 笠原はらか、何流なにりうぞといふに、お力流りきりうとて菊きくの井い一家いっかの左法さほう、
 疊たぐみに酒さけのまする流氣りうぎもあれば、大平おほびらの蓋ふたであほらする流氣りうぎもあ
 り、いやなお人ひとにはお酌しやくをせぬといふが大詰おほづめの極きまりでござんす
 とて臆おくしたるさまもなきに、客きやくはいよく面白おもしろがりて履歴りれきをは
 なして聞きかせよ定さだめて凄すさましい物ものがたり、語ことばがあるに相違さういなし、たゞ
 の娘むすめあがりとは思おもはれぬ何どうだとあるに、御覽ごらんなさりませ未まだ鬢びん
 の間あいだに角つのも生はへませず、其そのやうに甲羅かうらは經へませぬとてころくと

わら 笑ふを、左様ぬけてはいけぬ、眞實しんじつの處ところを話はなして聞きかせよ、素す
 性ぜうが言いへずは目的もくてきでもいへとて責せめる、むづかしうござんすね、
 いふたら貴君あなたびつくりなさりましよ天下てんかを望のぞむ大伴おほともの黒主くろぬしと
 わたしわたしこと は私が事こととていよく笑わらふに、これは何どうもならぬ其そのやうに茶利ちやり
 ばかり言いはで少すこし眞實しんの處ところを聞きかしてくれ、いかに朝てう夕せきを嘘うその
 なかなかにおく 中なかに送おくるからとてちつとは誠まことも交まじる筈はず、良人おつとはあつたか、それと
 も親おや故ゆゑかと眞しんになつて聞きかれるにお力りきかなしく成なりて、私わたしだと
 て人間にんげんでござんすほどに少すこしは心こころにしみる事こともあります、親おや
 は早はやくになくなつて今いまは眞實ほんの手てと足あしばかり、此こん様な者ものなれど女に
 ようぼう 房ぼうに持もたうといふて下くださるも無ないではなけれど未まだ良人おつとをば
 持もちませぬ、何どうで下品げひんに育そだちました身みなれば此こん様な事ことして終おはるの

でござんしよと投出したやうな詞に無量の感があふれてあだな
 すがたの浮氣らしきに似ず一節さむろう様子のみゆるに、何も下品
 に育つたからとて良人の持てぬ事はあるまい、殊にお前のやうな
 別品さむではあり、一足とびに玉の輿にも乗れさうなもの、夫
 れとも其やうな奥様あつかひ虫が好かで矢張り傳法肌の三尺
 帯が氣に入るかなと問へば、どうで其處らが落でござりましよ、
 此方で思ふやうなは先様が嫌なり、來いといつて下さるお人の
 氣に入るもなし、浮氣のやうに思召ましようが其日送りでご
 ざんすといふ、いや左様は言はさぬ相手のない事はあるまい、今
 店先で誰れやらがよろしく言ふたと他の女が言傳たでは無い
 か、いづれ面白い事があらう何とだといふに、あゝ貴君もいた

穿せん索さくなさります、馴なじ染みはざら一面めん、手紙てがみのやりとりは反古ほごの
 取とりかへツこ、書かけと仰おつしやれば起證きせうでも誓紙せいしでもお好このみ次第しだいさし
 上あげませう、女夫めをとやくそくななどと言いつても此方こちで破やぶるよりは先方さきさま様
 の性根せうねなし、主人しゅじんもちなら主人しゅじんが怕こわく親おやもちなら親おやの言いひな
 り、振向ふりむひて見みてくれねば此方こちらも追おひかけて袖そでを捉とらへるに及およば
 ず、夫それなら廢よせとて夫それ限ぎりに成なります、相手あいてはいくらもあれ
 ども一せう生たのを頼ひとむ人が無ないのでござんすとて寄よる邊べなげなる風情ふぜい、
 もう此こん様な話はなしは廢よしにして陽氣ようきにお遊あそびなさりまし、私わたしは何なにも
 沈しづんだ事ことは大嫌だいきらひ、さわいでさわいで騒さわぎぬかうと思おもひますと
 て手てを扣たいて朋輩ほうばいを呼よべば力りきちやん大分だいぶんおしめやかだねと三十
 女おんなの厚あつ化粧げしが來くるに、お此この娘この可か愛あいい人ひとは何なんといふ名なだと突だ

しぬけ 然しかに問とはれて、はあ私わたしはまだお名前なまへうけたまはを承うりませんでしたといふ、
 うそ 嘘うそをいふと益ぼんが來きるに 魔ま様さまへお參まいりが出で來きまいぞと笑わらへば、
 そ 夫それだどつて貴君あなた今日けふお目めにかゝつたばかりでは御坐ござりませんか、
 いあらた 今いま改あらためて伺うかひに出でやうとして居ゐましたといふ、夫それは何なんの事ことだ、
 あなた 貴君あなたのお名なをさと揚あげられて、馬鹿ばかくお力りきが怒おこるぞと大景氣おほげいき、
 むだ 無駄むだばなしの取とりやりに調子てうしづいて旦那だんなのお商しょう買ばいを當あてて見みま
 たか せうかとお高たかがいふ、何なに分ぶん願ねがひますと手てのひらを差出さしだせば、い
 それ 兎夫それには及およびませぬ人にん相さうで見みますると如何いかにも落おちつきたる顔かほ
 なが つき、よせくじつと眺ながめられて柵たなおろしでも始はじまつては溜たまらぬ、
 かみ 斯かう見みえても僕ぼくは官くわん員いんだといふ、嘘うそを仰おつしやれ日曜にちようのほか
 あそ に遊あそんであるく官くわん員いん様さまが有あります物ものか、力りきちやんまあ何なにでい

らつしやらうといふ、ばけもの化物ではいらつしやらないよと鼻の先で
ひと言つて分つた人に御褒賞たと懐中から紙入れを出せば、お力笑
たかひながら高ちやん失禮をいつてはならない此お方は御大身の
ごくわぞくさま御華族様おしのびあるきの御遊興さ、何の商買などがお
 ありなさらう、そんなのでは無いと言ひながら蒲團の上に乗せて
お置きし紙入れを取あげて、お相方の高尾にこれをばお預けなさ
 れまし、みなものの者に祝義しうぎでも遣はしませうとて答へも聞かずん
ひきいだくと引出すを、客は柱に寄かゝつて眺めながら小言こごともいはず、
しよじ諸事おまかせ申すと寛大かんだいの人なり。
たかお高はあきれて力りきちやん大底たいていにおしよといへども、何宜なにいいのさ、
まへこれはお前にこれは姉ねへさんに、大きいので帳場ちやうばの拂はらひを取つて残のこ

りは一同みんなにやつても宜いいいと仰おつしやる、お禮れいを申まをして頂いたいてお出いでと
 蒔ま散ちらせば、これこのこを此娘ここのこの十八番ばんに馴なれたる事こととて左さのみは遠ゑん
 慮よもいふては居ゐず、旦那だんなよろしいのでございますかと駄目だめを押お
 して、有ありがたうございまずと搔かきさらつて行くゆうしろ姿すがた、十九に
 しては更ふけてるねと旦那だんなどの笑わらひ出だすに、人ひとの悪わるい事ことを仰おつしや
 るとてお力りきは起たつて障しやうじ子を明あけ、手摺てすりに寄よつて頭痛づづうをたゝく
 に、お前まへはどうする金かねは欲ほしくないかと問とはれて、私わたしは別べつにほし
 い物ものがござんした、此品これさへ頂いたげば何なによりと帯おびの間あひだから客きやくの名刺めいし
 をとり出だして頂いたぐまねをすれば、何時いつの間まに引出ひきだした、お取とりかへ
 には寫真しゃしんをくれとねだる、此このつぎの土曜日どようびに來きて下くだされば御ご
 一處しよにうつしませうとて歸かへりかゝる客きやくを左さのみは止とめもせず、

うしろに廻りて羽織をきせながら、今日は失禮を致しました、
 亦のお出を待ますといふ、おい程の宜い事をいふまいぞ、空誓
 文は御免だと笑ひながらさつくと立つて階段を下りるに、お
 力帽子を手にして後から追ひすがり、嘘か誠か九十九夜の辛棒
 をなさりませ、菊の井のお力は鑄型に入つた女でござんせぬ、又
 形のかはる事もありませんといふ、旦那お歸りと聞て朋輩の女、
 帳場の女主もかけ出して唯今は有がたうと同音の御禮、頼ん
 で置いた車が來しとて此處からして乗り出せば、家中表へ送り
 出してお出を待まするの愛想、御祝儀の餘光としられて、後に
 は力ちゃん大明神様これにも有がたうの御禮山々。

三

客は結城朝之助とて、自ら道樂ものとは名のれども實体な
 る處折々に見えて身は無職業妻子なし、遊ぶに屈強なる
 年頃なればにや是れを初めに一週には二三度の通ひ路、お力も
 何處となく懐かしく思ふかして三日見えねば文をやるほどの様子
 を、朋輩の女子ども岡焼ながら弄かひては、力ちやんお樂し
 みであらうね、男振はよし氣前はよし、今にあの方は出世
 をなさるに相違ない、其時はお前の事を奥様とでもいふので
 あらうに今つから少し氣をつけて足を出したり湯呑であほるだけ
 は廢めにおし人がらが悪いやねと言ふもあり、源さんが聞たら何

うだらう氣違きちがひになるかも知れないとて冷評ひやかすもあり、あゝ馬車ばしや
 につて來くる時都合ときつがふが悪わるいから道普請みちぶしんからして貰もらいたいね、
 こんな溝どぶいた板いたのがたつく様な店やう先みせさきへ夫それこそ人ひとがらが悪わるくて横よこづ
 けにもされされないではないか、お前まへ方も最もう少すこしお行義ぎやうぎを直なほし
 てお給仕ききふじに出でられるやう心がけてお呉くれとずばくといふに、エ
 憎にくらしい其そのものいひを少すこし直なほさずは奥様おくさまらしく聞きこへまい、
 結城ゆふきさんが來きたら思おもふさまいふて、小言こごとをいはせて見みせようとて
 朝之助あさのすけの顔かほを見みるより此こん様な事ことを申まをして居ゐまする、何どうしても私わ
 たしども共ともの手てにのらぬやんちやなれば貴君あなたから叱しかつて下くだされ、第一だい
 湯呑ゆのみで呑のむは毒どくでござりましたよと告つげぐち口くちするに、結城ゆふきは眞面まじめ目め
 になりてお力酒りききけだけは少すこしひかへるとの嚴命げんめい、あゝ貴君あなたのやう

にもないお力りきが無理むりにも商買しょうばいして居ゐられるは此このちから力ちからと思おほし
 召めさぬか、私わたしに酒氣さかけが離はなれたら坐敷ざしきは三昧堂まいどうのやうに成なりませ
 う、ちつと察さつして下くだされといふに成程なるほどくとして結城ゆふきは二言ごんとい
 はざりき。

或ある夜よの月つきに下坐敷したざしきへは何處どこやらの工場こうばの一連むれ、井どんぶりたゝいて
 甚じん九くかつぽれの騷おほさはぎに大方おほかたの女子おなごは寄集よりあつまつて、例れいの二
 階かいの小坐敷こざしきには結城ゆふきとお力りきの二人ふたり限りなり、朝之助ともすけは寢ねころん
 で愉ゆくわい快かいらしく話はなしを仕しかけるを、お力りきはうるさうに生返事なまへんじ
 をして何なにやらん考かんがへて居ゐる様子やうす、どうかしたか、又頭痛またづうでもはじ
 まつたかと聞きかれて、何頭痛なにづうも何なにもしませぬけれど頻しきりに持病ぢびやうが
 起おこつたのですといふ、お前まへの持病ぢびやうは肝癩かんしやくか、いゝゑ、血ちの

道か、いゝゑ、夫では何だと聞かれて、何うも言ふ事は出来ませぬ、でも他の人ではなし僕ではないか何んな事でも言ふて宜さそうなもの、まあ何の病氣だといふに、病氣ではござんせぬ、唯こんな風になつて此様な事を思ふのですといふ、困つた人だなどいろくひみつ種々秘密があると見える、お父さんはと聞けば言はれませぬといふ、お母さんはと問へば夫れも同じく、これまでの履歴はといふに貴君には言はれぬといふ、まあ嘘でも宜いさよしんば作り言にしろ、かういふ身の不幸だとか大底の女はいはねばならぬ、しかも一度や二度あふのではなし其位の事を發表しても子細はなからう、よし口に出して言はなからうともお前に思ふ事がある位めくら按摩に探ぐらせても知れた事、聞かずとも知

れて居るが、夫れをば聞くのだ、どつち道同じ事だから持病といふのを先きに聞きたいといふ、およしなさいまし、お聞きになつても詰らぬ事でござんすとてお力は更に取あはず。

折から下坐敷より杯盤を運びきし女の何やらお力に耳打して兎も角も下までお出よといふ、いや行き度ないからよしてお呉

れ、今夜はお客が大變に酔ひましたからお目にかゝつたとてお話しも出来ませぬと斷つておくれ、あゝ困つた人だねと眉を寄せ

るに、お前それでも宜いのかへ、はあ宜いのさとて膝の上で撥を弄べば、女は不思議さうに立つてゆくを客は聞しまして笑ひなが

ら御遠慮には及ばない、逢つて來たら宜からう、何もそんなに體裁には及ばぬではないか、可愛い人を素戾しもひどからう、

追おひかけて逢あふが宜いい、何なんなら此處ここへでも呼よび給へ、片隅かたすみへ寄よ
 つて話はなしの邪魔じやまはすまいからといふに、串じようだん談だんはぬきにして結ゆ
 城ふきさん貴君あなたに隠かくしたとて仕方しかたがないから申まをしますが町ちやうない内すこで少
 しは巾はゞもあつた蒲團ふとんやの源七げんといふ人ひと、久ひさしい馴染なじみでござんした
 けれど今いまは見るみかげもなく貧乏びんぼうして八百屋やほやの裏うらの小ちいさな家うちにま
 いくつぶろの様やうになつて居いまする、女房にようぼもあり子供こどももあり、私わたし
 がやうな者ものに逢あひに来くる歳としではなけれど、縁ゑんがあるか未だいまに折おりふ
 し何なんの彼かのといつて、今いまも下坐敷したざしきへ來きたのでござんせう、何なにも
 今いまさら突出つきだすといふ譯わけではないけれど逢あつては色々いろく面倒めんどうな事こと
 もあり、寄よらず障さわらず歸かへした方が好いいのでござんす、恨うらまれるは
 覺悟かくごの前まへ、鬼おにだとも蛇じやだとも思おもふがようござりますとて、撥ぼちたゝみを疊み

に少し延びあがりて表を見おろせば、何と姿が見えるかと駈る、
 あゝ最う歸つたと見えますとて茫然として居るに、持病といふ
 のは夫れかと切込まれて、まあ其様な處でござんせう、お醫者
 様でも草津の湯でもと薄淋しく笑つて居るに、御本尊を拜
 みたいな俳優で行つたら誰れの處だといへば、見たら吃驚で
 ござりませう色の黒い背の高い不動さまの名代といふ、では心
 意氣かと問はれて、此様な店で身の上はたくほどの人、人の
 好いばかり取得とては皆無でござんす、面白くも可笑しくも何
 ともない人といふに、夫れにお前は何うして逆上せた、これは聞
 き處と客は起かへる、大方逆上性なのでござんせう、貴君の
 事をも此頃は夢に見ない夜はござんせぬ、奥様のお出來なさ

れた處を見たり、ぴつたりと御出のとまつた處を見たり、まだ／＼
 一層かなしい夢を見て枕紙がびつしよりに成つた事もござ
 んす、高ちやんなぞは夜る寐るからとても枕を取るよりはやく鼾
 の聲たかく、宜い心持らしいが何んなに浦山しうござんせ
 う、私はどんな疲れた時でも床へ這入ると目が冴へて夫は夫は色
 々るくの事を思ひます、貴君は私に思ふ事があるだらうと察して居
 て下さるから嬉しいけれど、よもや私が何をおもふか夫れこそは
 お分りに成りますまい、考へたとて仕方がない故人前ばかりの
 大陽氣、菊の井のお力は行ぬけの締りなしだ、苦勞といふ事は
 するまいと言ふお客様もござります、ほんに因果とでもい
 ふものか私が身位かなしい者はあるまいと思ひますとて潜然

とするに、珍らしい事陰氣のはなしを聞かせられる、慰めたいに
 も本末をしらぬから方がつかぬ、夢に見てくれるほど實があら
 ば奥様にしてくれる位いひそうな物だに根つからお聲が、りも
 無いは何ういふ物だ、古風に出るが袖ふり合ふもさ、こんな商
 賣を嫌だと思ふなら遠慮なく打明けばなしを爲るが宜い、僕
 は又お前のやうな氣では寧氣樂だとかいふ考へで浮いて渡る事か
 と思つたに、夫れでは何か理屈があつて止むを得ずといふ次第か、
 苦しからずは承りたい物だといふに、貴君には聞いて頂かうと此
 のあひだ
 間から思ひました、だけれども今夜はいけません、何故く、
 何故でもいけません、私は我まゝ故、申まいと思ふ時は何うして
 も嫌やでござんすとて、ついと立つて椽がはへ出るに、雲なき空

の月つきかげ涼すずしく、見みおろす町まちにからころと駒下駄こまげたの音おとさして行ゆきか
 ふ人ひとのかけ分あきら明らかなり、結城ゆふきさんと呼よぶに、何なんだとして傍そばへゆけば、
 まあ此處こゝへお座すはりなさいと手てを取りとて、あの水菓子屋みづぐわしやで桃ももを買かふ
 子こがござんしよ、可愛かわいらしき四よつ計ばかりの、彼あれ子こが先刻さつきの人ひとのでござ
 んす、あの小ちいさな子こ心こゝろにもよく憎にくくと思おもふと思みえて私わたしの
 事ことをば鬼おに々くといひまする、まあ其そん様んな悪わる者ものに見みえまするか
 て、空そらを見みあげてホツと息いきをつくさま、堪こらへかねたる様やう子は五音いん
 の調てうし子しにあらはれぬ。

四

おなじ新開の町はづれに八百屋と髪結床が庇合のやうな細露
 路、雨が降る日は傘もさゝれぬ窮屈さに、足もととは處
 々に溝板の落し穴あやふげなるを中にして、兩側に立て
 たる棟割長屋、突當りの芥溜わきに九尺二間の上り框朽ち
 て、雨戸はいつも不用心のたてつけ、流石に一方口にはあらで
 やまての手の仕合は三尺斗の椽の先に草ぼうくの空地、それ
 が端を少し圍つて青紫蘇、ゑぞ菊、隠元豆の蔓などを竹のあら
 垣に搦ませたるがお力が所縁の源七が家なり、女房はお初
 といひて二十八か九にもなるべし、貧にやつれたれば七つも年の
 おほく見えて、お齒黒はまだらに生へ次第の眉毛みるかげもなく、
 洗ひざらしの鳴海の裕衣を前と後を切りかへて膝のあたりは目立

ぬやうに小針のつぎ當、狭帯きりゝと締めて蟬表の内
こはり あて せまおび し せみおもて ないしよ
 職、盆前よりかけて暑さの時分をこれが時よと大汗になり
く ほんまへ あつ じぶん とき おほあせ
 ての勉強せはしなく、揃へたる籐を天井から釣下げて、し
べんきやう そろ たの てんげう つりさ
 ばしの手數も省かんとて數のあがるを樂しみに脇目もふらぬ様あ
てすう はぶ かず たの わきめ げん さま
 はれなり。もう日が暮れたに太吉は何故かへつて來ぬ、源さんも
またどこ ある ひ く たきち なぜ こ げん
 又何處を歩いて居るかしらんとて仕事を片づけて一服吸つけ、苦
らう め さら どびん した ほち か すい
 勞らしく目をぱちつかせて、更に土瓶の下を穿くり、蚊いぶし火
ぼち ひ とりわ じやくゑん もちいだ ひろ あつ すぎ は かぶ
 鉢に火を取分けて三尺の椽に持出し、拾ひ集めの杉の葉を冠せ
て ふう く と ふきたつ ふす く と 煙 た ち の ぼ り て 軒 場 に の が
 れる蚊の聲凄まじゝ、太吉はがたゝと溝板の音をさせて母さ
か こゑ まじ たきち どぶいた おと か
 ん今戻つた、お父さんも連れて來たよと門口から呼立るに、
いまもど とつ つ き かどぐち よびたつ

大層おそいではないかお寺の山へでも行はしないかと何の位案
 じたらう、早くお這入といふに太吉を先に立て、源七は元氣な
 くぬつと上る、おやお前さんお歸りか、今日は何んなに暑かつた
 でせう、定めて歸りが早からうと思つて行水ぎやうずゐを沸かして置ま
 した、ざつと汗を流したら何うでござんす、太吉もお湯ぶうに這入な
 といへば、あいと言つて帶おびを解く、お待お待、今加減いまかげんを見てやる
 とて流しもとに鹽たらいを据へて釜かまの湯ゆを汲くみ出し、かき廻まわして手拭てぬぐひ
 を入れて、さあお前さん此子このこをもいれて遣やつて下くだされ、何をぐた
 りと爲してお出いでなさる、暑あつさにでも障さわりはしませぬか、さうでなけ
 れば一杯ぱいあびて、さつぱりに成なつて御膳ごぜんあがれ、太吉たきちが待つて居ゐ
 ますからといふに、お、左様さうだと思おもひ出だしたやうに帶おびを解といて流なが

しへ下りれば、そゞろに昔しの我身が思はれて九尺二間の臺
 處で行水つかふとは夢にも思はぬもの、ましてや土方の手傳ひ
 して車の跡押にと親は生つけても下さるまじ、あゝ詰らぬ夢を
 見たばかりにと、ぢつと身にしみて湯もつかはねば、父ちやん脊
 中洗つてお呉れと太吉は無心に催促する、お前さん蚊が喰ひま
 すから早々とお上りなされと妻も氣をつくるに、おいおいと返
 事しながら太吉にも遣はせ我れも浴びて、上にあがれば洗ひ晒せ
 しさばくの裕衣を出して、お着かへなさいましと言ふ、帶まき
 つけて風の透く處へゆけば、妻は野代の膳のはげかゝりて足はよ
 ろめく古物に、お前の好きな冷奴にしましたとて小井
 に豆腐を浮かせて青紫蘇の香たかく持出せば、太吉は何時しか臺

より飯櫃取おろして、よつちよいよつちよいと擔ぎ出す、坊主
 は我れが傍に來いとて頭を撫でつゝ箸を取るに、心は何を思ふと
 なけれど舌に覺えの無くて咽の穴はれたる如く、もう止めにする
 とて茶碗を置けば、其様な事があります物か、力業をする
 人が三膳の御飯のたべられぬと言ふ事はなし、氣合ひでも悪うご
 ざんすか、夫れとも酷く疲れてかと問ふ、いや何處も何とも無い
 やうなれど唯たべる氣にならぬといふに、妻は悲しさうな目をし
 てお前さん又例のが起りましたらう、夫は菊の井の鉢肴は甘
 くもありましたらうけれど、今の身分で思ひ出した處が何となり
 まする、先は賣物買物お金さへ出來たら昔しのやうに可愛が
 つても呉れませう、表を通つて見ても知れる、白粉つけて美い

衣類きものきて迷まよふて來くる人ひとを誰たれかれなしに丸まるめるが彼あの人ひと達たちが商し
 買やうばい、あゝ我おれが貧びんぼう乏うに成なつたから構かまいつけて呉くれぬなど思おも
 へば何なんの事ことなく濟すみましよう、恨うらみにでも思おもふだけがお前まへさんが未み
 練れんでござんす、裏うら町の酒屋さかやの若わかい者もの知しつてお出いでなさう、二葉ふた
 やのお角かくに心しんから落おち込んで、かけ先さきを殘のこらず使つかひ込み、夫それを埋う
 めやうとて雷らい神じん虎とらが盆ぼん筵ござの端はしについたが身みの詰つまり、次第しだいに惡わ
 るいが事ことが染しみて終しまひには土藏どぞうやぶりまでしたさうな、當いま時ま男をとこは
 監獄かんごく入りしてもつそう飯めしたべて居いやうけれど、相あ手てのお角かくは平へ
 氣いきなもの、おもしろ可をか笑わらしく世よを渡わたるに咎とがめる人ひとなく美事みごと繁はん
 昌うして居ゐまする、あれを思おもふに商買しやうばい人にんの一徳とく、だまされた
 は此方こちらの罪つみ、考かんがへたとて始はじまる事ことではござんせぬ、夫それよりは氣きを

とりなほ
 取直して稼業に精を出して少しの元手も拵へるやうに心がけて
 くだされ、お前に弱られては私も此子も何うする事もならで、夫こ
 そ路頭に迷はねば成りませぬ、男らしく思ひ切る時あきらめてお
 かねへ出来ようならお力はおろか小紫でも揚巻でも別荘
 こしらへて圍うたら宜うござりましょう、最うそんな考へ事は止
 めにして機嫌よく御膳あがつて下され、坊主までが陰氣らしい沈
 んで仕舞ましたといふに、みれば茶椀と箸を其處に置いて父と
 は、母との顔をば見くらべて何とは知らず氣になる様子、こんな可愛
 もの
 い者さへあるに、あのやうな狸の忘れられぬは何の因果かと胸
 なか
 のなかき廻されるやうなるに、我れながら未練ものめと叱りつけ
 て、いや我れだとして其様に何時までも馬鹿では居ぬ、お力など、

名な計ばかりもいつて呉くれるな、いはれると以前もとの不出ふで來かしを考かんへ出だし
 ていよく顔かほがあげられぬ、何なんの此この身みになつて今いま更さら何なにをおもふ
 物ものか、食めしがくへぬとても夫それは身からだ體たの加か減げんであらう、何なにも格かく別べつ
 案あんじてくれるには及およばぬ故ゆゑ小せう僧そうも十分ぶんにやつて呉くれとて、ころり
 と横よこになつて胸むねのあたりをはたくと打うちあふぐ、蚊かやり遣りの烟けむりにむせ
 ばぬまでも思おもひにもえて身みの暑あつげなり。

五

誰たれ白しろ鬼おにとは名なをつけし、無む間げん地ぢ獄ごくのそこはかとなけしく景しき色きづく
 り、何どこ處こにからくりのあるとも見みえねど、逆さかさ落おとしの血ちの池いけ、借し

やくきん 金の針の山に追ひのぼすも手の物ときくに、寄つてお出でよ
 と甘へる聲も蛇くふ雉子と恐ろしくなりぬ、さりとも胎内十月
 の同じ事して、母の乳房にすがりし頃は手打くあわゝの可愛げ
 に、紙幣と菓子との二つ取りにはおこしをお呉れと手を出したる
 物なれば、今の稼業に誠はなくとも百人の中の一人に眞からの涙
 をこぼして、聞いておくれ染物やの辰さんが事を、昨日も川田
 やが店でおちやつぴいのお六めと悪戯まわして、見たくもない往
 來へまで擔ぎ出して打ちつ打たれつ、あんな浮いた了簡で
 末が遂げられやうか、まあ幾歳だとおもふ三十は一昨年、宜い加
 減に家でも拵へる仕覺をしてお呉れと逢ふ度に異見をするが、其
 のときかぎ
 時限りおいくと空返事して根つから氣にも止めては呉れぬ、

父とつさんは年としをとつて、母はさんと言いふは目めの悪わるい人ひとだから心しん配ばい
 をさせないやうに早はやく締しまつてくれ、ば宜いいが、私わたしはこれでも彼あの
 人ひとの半はん纏てんをば洗せん濯たくして、股も引ひのほころびでも縫ぬつて見みたい
おもと思おもつて居あるに、彼あんな浮ういた心こころでは何いつ時ひき引とつて呉くれるだらう、
かんが考かんへるとつく／＼奉ほう公こうが嫌いやになつてお客きやくを呼よぶに張はり合あいもな
 い、あゝくさく／＼するるとて常つねは人ひとをも欺だます口くちで人ひとの愁つらきを恨うらみ
 の言葉ことば、頭づう痛うを押をさへて思し案あんに暮くれるもあり、あゝ今日けふは盆ぼんの十六
 日にちだ、お焰えん魔ま様さまへのお祭まいりに連つれ立だつて通とほる子こ供ども達たちの奇き麗れいな
 着き物ものきて小こ遣づかひもらつて嬉うれしさうな顔かほしてゆくは、定さだめて定さだめて
 ふたりそろ二人ふたり揃かつて甲か斐ひ性せうのある親おやをば持もつて居あるのである、私わたしが息むすこ子この
 與よ太郎たらうは今日けふの休やすみに御ご主しゆ人じんから暇ひまがでで何どこ處こへ行ゆつて何どんな

こと 遊ばうとも定めし人が羨しかる、父さんは呑ぬけ、いまだ
 宿^{やど}とても定^{さだ}まるまじく、母は此様な身^みになつて恥^{はづ}かしい紅白^{べにおし}
 粉^{ろい}、よし居處^{ゐどころ}が分つたとて彼^あの子^こは逢^あひに來^きても呉^くれまじ、
 去^{きよねん}年^{むかふじま}向^{むかふじま} 島^{しま}の花見^{はなみ}の時^{とき}女^{にようぼう}房^{ぼう}づくりして丸^{まるまげ}鬚^げに結^ゆつて朋^ほ
 輩^{うばい}と共^{とも}に遊^{あそ}びあるきしに土手^{どて}の茶屋^{ちや}であの子^こに逢^あつて、これ
 〵と聲^{こゑ}をかけしにさへ私^{わたし}の若^{わか}く成^{なり}しに呆^{あき}れて、お母^{つか}さんでござり
 ますかと驚^{おどろ}きし様子^{やうす}、ましてや此^{この}大^{おほ}島^{しま}田^だに折^{をり}ふしは時好^{じこう}の花^{はな}
 簪^{かんざし}さしひらめかしてお客^{きやく}を捉^とらへて串^{じやうだん}談^{だん}いふ處^{ところ}を聞^きかば子^こ
 心^{こころ}には悲^{かな}しくも思^{おも}ふべし、去^{きよねん}年^{ねん}あひたる時^{とき}今^{いま}は駒^{こま}形^{かた}の蠟^{ろうそ}
 燭^くやに奉^{ほう}公^{こう}して居^ゐまする、私^{わたし}は何^{なん}な愁^つらき事^{こと}ありとも必^{かな}ら
 ず辛^{しん}抱^{ぼう}しとげて一人前^{にんまへ}の男^{をとこ}になり、父^とさんをもお前^{まへ}をも今^{いま}に樂^{らく}

をばお爲せ申まをします、何うぞ夫それまで何なんなりと堅氣かたぎの事ことをして一人ひとり
よわたで世渡りをして居ゐて下くだされ、人ひとの女房にようぼうにだけはならず居ゐて
くだ下されと異見あけんを言いはれしが、悲かなしきは女子をなごの身みの寸燐まつちの箱はこはりし
ひとりぐちすぐて一人人口過ひとしがたく、さりとして人ひとの臺だいどころ處はを這はふも柔弱にうじやく
からだの身體つとなれば勤めがたくて、同おなじ憂うき中なかにも身みの樂らくなれば、此こん様
ことな事ことして日ひを送おくる、夢ゆめさら浮ういた心こころでは無なけれど言い甲斐ひがひのないお
ふくろあ袋あと彼この子こは定さだめし爪つまはじきするであらう、常つねは何なんとも思おもはぬ島
まだ田たがめ今日斗けふかりはづは恥ちかしいと夕ゆふぐれの鏡かゞみの前まへに涕なみだくむもあるべし、
きく菊きくの井いのお力りきとても惡魔あくまの生うまれ替かはりにはあるまじ、さる子細しさいあれ
ななきばこそ此處こゝの流ながれに落おちこんで嘘うそのありたけ串談じようだんに其日そのひを送おくつ
よしのがみて情なさけは吉野紙よしのがみの薄物うすものに、螢ほたるの光ひかりぴつかりとする斗ばかり、人ひとの涕なみだは

百年も我まんして、我ゆゑ死ぬる人のありとも御愁傷さまと脇
 を向くつらさ他處目も養ひつらめ、さりとも折ふしは悲しき事恐
 ろしき事胸にたゝまつて、泣くにも人目を恥れば二階座敷の床の
 間に身を投ふして忍び音の憂き涕、これをば友朋輩にも洩らさ
 じと包むに根生のしつかりした、氣のつよい子といふ者はあれ
 ど、障れば絶ゆる蛛の糸のはかない處を知る人はなかりき、七月
 十六日の夜は何處の店にも客入込みて都々一端歌の景氣よ
 く、菊の井の下座敷にはお店者五六人寄りあつて調子の外
 れし紀伊の國、自まんも恐ろしき洞間聲に霞の衣衣紋坂と氣
 取るもあり、力ちやんは何うした心意氣を聞かせないか、やつ
 たくと責められるに、お名はさゝねど此坐の中にと普通通の

嬉うれしがらせを言いつて、やんや〜と喜よろこばれる中なかから、我わがこひ戀ひは細ほ
そだにがは 谷川まるきばしの丸木橋わたるにや怕こわし渡わたらねばと謳うたひかけしが、何なにを
 か思おもひ出だしたやうにあゝ私わたしは一寸無禮ちよつとしつれいをします、御免ごめんなさいよ
 とて三味線さみせんを置おいて立たつに、何處どこへゆく何處どこへゆく、逃にげてはな
 らないと坐中ざちゆうの騒さわぐに照てちやん高たかさん少すこし頼たのむよ、直じき歸かへるから
 とてずつと廊下らうかへ急いそぎ足あしに出いでしが、何なにをも見みかへらず店みせぐち口くちから
 下駄げたを履はいて筋すぢむか向むかふの横よこ町ちようの闇やみへ姿すがたをかくしぬ。
 お力りきは一散さんに家いゑを出でて、行ゆかれる物ものなら此このまゝに唐天竺からてんぢくの果はてま
 でも行いつて仕舞しまいたい、あゝ嫌いやだ嫌いやだ嫌いやだ、何どうしたなら人ひとの聲こゑも
 聞きこえない物ものの音おともしない、静しづかな、静しづかな、自じぶん分の心こゝろも何なにもぼう
 つとして物もの思おもひのない處ところへ行ゆかれるであらう、つまらぬ、くだ

らぬ、面白くない、情ない悲しい心、細い中に、何時まで私
 は止められて居るのかしら、これが一生か、一生がこれか、あゝ
 嫌だくと道端の立木へ夢中に寄かゝつて暫時そこに立どま
 れば、渡るにや怕し渡らねばと自分の謳ひし聲を其まゝ何處とも
 なく響いて来るに、仕方がない矢張り私も丸木橋をば渡らずは
 なるまい、父さんも踏かへして落してお仕舞なされ、祖父さんも同
 じ事であつたといふ、何うで幾代もの恨みを背負て出た私なれ
 ば爲る丈の事はしなれば死んでも死なれぬのであらう、情ない
 とても誰れも哀れと思ふてくれる人はあるまじく、悲しいと言へ
 ば商買がらを嫌ふかと一ト口に言はれて仕舞、ゑゝ何うなり
 とも勝手になれ、勝手になれ、私には以上考へたとて私の身の

行き方は分らぬなれば、分らぬなりに菊の井のお力を通してゆか
 う、人情しらず義理しらずか其様な事も思ふまい、思ふたと
 て何うなる物ぞ、此様な身で此様な業體で、此様な宿世で、何
 うしたからとて人並みでは無いに相違なければ、人並の事を考へ
 て苦勞する丈間違ひである、あゝ陰氣らしい何だとして此様な處に
 立つて居るのか、何しに此様な處へ出て來たのか、馬鹿らしい氣
 ちがひ 違じみた、我身ながら分らぬ、もうくゝ販りませうとて 横
 町の闇をば出はなれて夜店の並ぶにぎやかなる小路を氣まぎら
 しにとぶらくゝ歩るけば、行かよふ人の顔少さくゝ擦れ違ふ人
 の顔さへも遙とほくに見るやう思はれて、我が踏む土のみ一丈も
 上にあがり居る如く、がやくゝといふ聲は聞ゆれど井の底に物を

おと落したる如き響きに聞なされて、人の聲は、人の聲、我が考へは
 かんが考へと別々に成りて、更に何事にも氣のまぎれる物なく、人
 とだち立おびたゞしき夫婦あらしひの軒先などを過ぐるとも、唯我
 ひろの原の冬枯れを行くやうに、心に止まる物もなく、
 き氣にかゝる景色にも覺えぬは、我れながら酷く逆上て人心の
 ないのにと覺束なく、氣が狂ひはせぬかと立どまる途端、お力
 どこ何處へ行くとして肩を打つ人あり。

六

十六日は必らず待まする來て下されと言ひしをも何も忘れて、今

まで思ひ出しもせざりし結城の朝之助に不圖出合て、あれと驚き
おも だ ゆふき とも すけ ふとであひ おどろ
 し顔かほつきの例れいに似合ぬ狼狽あわてかたがをかしきとて、からくと男の
を とこ
 笑わらふに少し恥はづかしく、考かんがへ事ごとをして歩いて居あれば不意ふゐのやうに
あは しまい
 惶あはて、仕舞しまいしました、よく今夜こんやは來きて下くださりましたと言いへば、あれ
 ほど約束やくそくをして待まつてくれぬは不心ふしんちう中ちゆうとせめられるに、何なんなり
 と仰おつしやれ、言い譯ひわけは後のちにしまするとて手てを取りとて引ひけば彌次馬やぢうま
 がうるさいと氣きをつける、何どうなり勝手かつてに言いはせませう、此方こちらは
こちら ひとなか
 此方こちらと人ひと中ちゆうを分わけて伴ともひぬ。
したざしき
 下座敷したざしきはいまだに客きやくの騒さわぎはげしく、お力りきの中座ちゆうざをしたるに不
きよう やかま
 興きようして喧やかましかりし折おりから、店口みせぐちにておやお販かへりかの聲こゑを聞きく
きやく おき
 より、客きやくを置おきざりに中坐ちゆうざするといふ法ほうがあるか、販かへつたらば此處こゝ

へ來い、顔を見ねば承知せぬぞと威張たてるを聞流しに二階
こ かほ し しょうち い ばり き なが ご し ゆ あ い て か い
 の座敷へ結城を連れあげて、今夜も頭痛がするので御酒の相手は
ざ し き ゆ ふ き つ こ ん や づ う ご し ゆ あ い て
 出來ませぬ、大勢の中に居れば御酒の香に酔ふて夢中になるも
で き お ほ ぜ い な か あ る ご し ゆ か あ そ ふ て む ち う
 知れませぬから、少し休んで其後は知らず、今は御免なさりま
し す こ やす そ の ち し いま ご め ん
 せと斷りを言ふてやるに、夫れで宜いのか、怒りはしないか、や
こ と は い そ い い か お こ
 かましくなれば面倒であらうと結城が心づけるを、何のお店もの
し ろ う り め ん だ う ゆ ふ き こ ろ なん た な
 白瓜が何んな事を仕出しませう、怒るなら怒れでござんすとて
こ を ん な こ と し い だ を こ を こ
 小女に言ひつけてお銚子の支度、来るをば待かねて結城さん今
こ を ん な い い ち やう し した く く る を ば まち か ね て ゆ ふ き さん こ
 夜は私に少し面白くない事があつて氣が變つて居まするほどに
ん や わ た し す こ お も し ろ こ と き か は あ つ て あ る ほ ど に
 其氣で附合て居て下され、御酒を思ひ切つて呑みまするから止
その き つき あ つ あ る く だ ご し ゆ おも き き ち つ て の み ま す る か ら と ど
 めて下さるな、酔ふたらば介抱して下されといふに、君が酔つ
く だ あ そ ふ た ら ば か い は う し て く だ い ふ に き み が あ そ ふ つ

たを未だに見た事がない、氣が晴れるほど呑むは宜いが、又頭痛
 がはじまりはせぬか、何が其様なに逆鱗にふれた事がある、僕
 らに言つては悪るい事かと問はれるに、いゝ貴君には聞て頂きた
 いのでござんす、酔ふと申ますから驚いてはいけませぬと嫫然
 として、大湯呑を取よせて二三杯は息をもつかざりき。
 常には左のみに心も留まらざりし結城の風采の今宵は何となく尋
 常ならず思はれて、肩巾のありて背のいかにも高き處より、落
 ついて物をいふ重やかなる口振り、目つきの凄くて人を射るやう
 なるも威嚴の備はれるかと嬉しく、濃き髪の毛を短かく刈あげて
 頬足のくつきりとせしなど今更のやうに眺られ、何をうつと
 りして居ると問はれて、貴君のお顔を見て居ますのさと言へば、

此奴めがと睨みつけられて、おゝ怕いお方と笑つて居るに、串
 談はのけ、今夜は様子が唯でない聞たら怒るか知らぬが何か事
 件があつたかととふ、何しに降つて沸いた事もなければ、人との
 紛雜などはよし有つたにしろ夫れは常の事、氣にもかゝらねば何
 しに物を思ひませう、私の時より氣まぐれを起すは人のするので
 は無くて皆心がらの淺ましい譯がござんす、私は此様な賤しい身
 の上、貴君は立派なお方様、思ふ事は反對にお聞きになつて
 も汲んで下さるか下さらぬか其處ほどは知らねど、よし笑ひ物に
 なつても私は貴君に笑ふて頂き度、今夜は残らず言ひまする、ま
 あ何から申さう胸がもめて口が利かれぬとて又もや大湯呑に呑
 む事さかんなり。

なに さきわたし 私 み が身 じだらく の自墮落 しやうち を承知 あ して居 ゐ て下 くだ され、もとより箱入 はこい
 りの生 きむすめ 娘 すこ ならねば少 さつ しは察 み しても居 ゐ て下 くだ さろうが、口 くちぎれい 奇麗 な
 事 こと はいひますとも此 この あたりの人 ひと に泥 どろ の中 なか の蓮 はす とやら、悪業 わるさ に染 そ ま
 らぬ女子 おなご があらば、繁昌 はんじやう どころか見 み にくる人 ひと もあるまじ、貴君 あなた は
 べつもの わたし ところ く、ひと ひと 別物 べつもの、私 わたし が處 ところ へ來 こ る人 ひと とても大 たい 底 てい はそれ おほ と思 おぼ しめせ、これ こ で
 も折 おり ふしは世間 せけん さま並 なみ の事 こと を思 おも へて恥 はづ かしい事 こと づらい事情 こゝろ ない事 こと
 とも思 おも はれるも寧 いっそしやくけん 九尺 おつと 二間 ふた でも極 き まつた良人 おつと といふに添 そ うて身 み を
 固 かた めようと考 かんが へる事 こと もござんすけれど、夫 そ れが私 わたし は出 で 來 き ませぬ、
 夫 そ れかと言 い つて來 く るほどのお人 ひと に無 ぶ 愛 あい 想 さう もなりがたく、可 かわい 愛 い
 の、いとしいの、見 み 初 そめ ましたの み と出 で 鱈 たらめ 目 め のお世 せ 辭 ぢ をも言 い はねばな
 らず、數 かず の中 なか には真 ま にうけて此 こ ん な げ種 やくざ を女房 にようぼ にと言 い ふて下 くだ さる

方かたもある、持もたれたら嬉うれしいか、添そうたら本望ほんもうか、夫それが私わたしは
 分わかりませぬ、そもくの最はじめ初めから私わたしは貴君あなたが好すきで好すきで、一す日じつ
 お目おめにかゝらねば戀こひしいほどなれど、奥おく様さまにと言いふて下くだされた
 ら何どうでござんしよか、持もたれるは嫌いやなり他處よそながらは慕したはし、
 一くちト口くちに言いはれたら浮氣者うわきものでござんせう、あゝ此こん様な浮氣者うわきもの
 には誰たれがしたと思召おほしめす、三代傳だいいたはつての出來できそこね、親父おやぢが一生せう
 もかなしい事ことでござんしたとてほろりとするに、其親父そのおやぢさむはと
 と問とひかけられて、親父おやぢは職しよくにん人にん、祖父ぢいは四角かくな字じをば讀よんだ人ひと
 でござんす、つまりは私わたしのやうな氣違きちがひで、世よに益ゑきのない反古紙ほんごがみ
 をこしらへしに、版はんをばお上かみから止とめられたとやら、ゆるされぬ
 とかに斷食だんじきして死しんださうに御座ござんす、十六との年としから思おもふ事ことが

あつて、生れも賤しい身であつたれど一念に修業して六十にあ
 まるまで仕出來したる事なく、終は人の物笑ひに今では名を知
 る人もなしとて父が常住歎いたを子供の頃より聞知つて居り
 ました、私の父といふは三つの歳に椽から落ちて片足あやしき風
 になりたれば人中に立まじるも嫌やとて居職に飾の金物を
 こしらへましたれど、氣位たかくて人愛のなければ最負にして
 くれる人もなく、あゝ私が覺えて七つの年の冬でござんした、寒
 うちうおやこにふるゆかたで、父は寒いも知らぬか柱に寄つて
 中親子三人ながら古裕衣で、母は欠けた一つ竈に破れ鍋かけて私
 細工物の工夫をこらすに、母は欠けた一つ竈に破れ鍋かけて私
 に去る物を買ひに行けといふ、味噌こし下げて端たのお錢を手
 握つて米屋の門までは嬉しく驅けつけたれど、歸りには寒さの身

にしみて手も足も龜かみたれば五六軒隔てし溝板の上の氷に
 すべり、足溜りなく轉ける機會に手の物を取落して、一枚は
 づれし溝板のひまよりざらくと翻れ入れば、下は行水きたな
 き溝泥なり、幾度も覗いては見たれど是れをば何として拾は
 れませう、其時私は七つであつたれど家の内の様子、父母の
 心をも知れてあるにお米は途中で落しましたと空の味噌こしさげ
 て家には歸られず、立てしばらく泣いて居たれど何うしたと問ふ
 て呉れる人もなく、聞いたからとて買てやらうと言ふ人は猶更
 なし、あの時近處に川なり池なりあらうなら私は定し身を投げ
 て仕舞ひましたろ、話しは誠の百分一、私は其頃から氣が狂つ
 たのでござんす、販りの遅きを母の親案して尋ねに来てくれたを

ば時機しほに家うちへは戻もどつたれど、母はも物ものいはず父て親おやも無言むごんに、誰たれ
 ひと物たしをば叱しかる物ものもなく、家うちの内森うちもんとして折々おり溜息ためいきの聲こゑのもれ
 一人私わたしをばみ切きられるより情なさけなく、今日けふは一日いちじき斷食だんじきにせうと父ちち
 の一言こといひ出だすまでは忍しのんで息いきをつくやうで御座ござんした。
 いひさしてお力りきは溢あふれ出いづる涙なみだの止とめ難がたければ紅くれなひの手巾はんけちかほに
 押當おしあてて其端そのはしを喰くひしめつゝ物ものいはぬ事こと小半時こはんとき、坐ざには物ものの
 音おともなく酒さけの香かしたひて寄よりくる蚊かのうなり聲こゑのみ高たかく聞きこえぬ。
 顔かほをあげし時ときは頬ほうに涙なみだの痕あとはみゆれども淋さびしげの笑ゑみをさへ寄よせ
 て、私わたしはそのやうびんぼうに人ひとの娘むすめ、氣違きちがひは親おやゆづりで折おりふし起おこるの
 でござります、今夜こんやも此様こんな分わからぬ事こといひ出だして嘸さぞ貴君あなた御迷惑ごめいわく
 で御座ござんしてしよ、もう話はなしはやめまする、御機嫌ごきげんに障さわつたらば

ゆるして下され、誰れか呼んで陽氣にしませうかと問へば、いや
ゑんりよ遠慮は無沙汰、その父親は早くに死くなつてか、はあ母さん
はいけつかくが肺結核といふを煩つて死なりましたから一週忌の來ぬほどに
あとお跡を追ひました、今居りましても未だ五十、親なれば褒めるでは
な無けれど細工は誠に名人と言ふても宜い人で御座んした、なれ
めいじんども名人だとして上手だとして私等が家のやうに生れついたは
な何にもなる事は出来ないで御座んせう、我身の上にも知られま
ものおもするとして物思はしき風情、お前は出世を望むなど突然に朝
すけ之助に言はれて、ゑつと驚きし様子に見えしが、私等が身に
のぞて望んだ處が味噌こしが落、何の玉の輿までは思ひがけませぬと
うそいふ、嘘をいふは人に依る始めから何も見知つて居るに隠すは野

暮ぼの沙汰さたではないか、思おもひ切きつてやれ／＼とあるに、あれ其そのやう
 なけしかけ詞ことばはよして下くだされ、何どうで此こん様な身みでござんするにと
 打うちしほれて又またもの言いはず。
 今宵こよひもいたく更ふけぬ、下坐敷したざしきの人ひとはいつか歸かへりて表おもての雨戸あまどをた
 てると言いふに、朝とも之助すけおどろきて歸かへり支度したくするを、お力りきは何どうで
 も泊とまらするといふ、いつしか下駄げたをも藏かくさせたれば、足あしを取とられ
 て幽ゆうれい霊いならぬ身みの戸とのすき間まより出いづる事こともなるまじとて今宵こよひは
 此處こゝに泊とまる事こととなりぬ、雨戸あまどを鎖とぎす音おと一ひとしきり賑にぎはしく、後のちには
 透すきもる燈とも火しびのかげも消きえて、唯たゞ軒下のきしたを行ゆきかよふ夜行やこうの巡じゆん
 査さの靴音くつおとのみ高たかかりき。

七

おもひ出したとて今更いまさらに何どうなる物ものぞ、忘わすれて仕舞しまへ諦あきらめて仕舞しま
 へと思案しあんは極きめながら、去きよねん年の盆ぼんには揃そろひの浴衣ゆかたをこしらへて
 ふたりしよに藏くらまへ前まへへ參さんけい詣いしたる事ことなんと思おもふともなく胸むねへうか
 びて、盆ぼんに入りては仕事しごとに出いづる張はりもなく、お前まへさん夫それではなら
 ぬぞへと諫いさめ立たてる女にようぼう房ぼうの詞ことばも耳みうるさく、エ、何なにも言いふな
 黙だまつて居ゐろとて横よこになるを、黙だまつて居ゐては此このひ日ひが過すぐされませぬ、
 からだわが身體からだが悪わるくば薬くすりも吞のむがよし、御醫おゐしや者しやにかゝるも仕方しかたがなけれ
 ど、お前まへの病やまひは夫それではなしに氣きさへ持もち直ちせば何處どこに悪わるい處ところ
 があるう、少すこしは正しやうき氣きに成なつて勉強べんきやうをして下くだされといふ、いつ

でも同じ事は耳にたこが出来て氣の薬にはならぬ、酒でも買って來
 てくれ氣まぎれに呑んで見やうと言ふ、お前さん其お酒が買へる
 ほどなら嫌やお言ひなさるを無理に仕事に出て下されとは頼み
 ませぬ、私が内職とて朝から夜にかけて十五錢が關の山、親
 子三人口おも湯も満足には呑まれぬ中で酒を買へとは能く能く
 お前無茶助になりなさんした、お盆だといふに昨日らも小僧に
 は白玉一つこしらへても喰べさせず、お精靈さまのお店か
 ざりも拵へくれねば御燈明一つで御先祖様へお詫びを申て居る
 も誰が仕業だとお思ひなさる、お前が阿房を盡してお力づらめに
 釣られたから起つた事、いふては悪るけれどお前は親不孝子不
 孝、少しは彼の子の行末をも思ふて眞人間になつて下され、

御酒ごしゆを呑のんで氣きを晴はらすは一時とき、眞しんから改かい心しんして下くださらねば心こころ
もと元もとなく思おもはれますとて女にようぼう房ぼう打うちなげくに、返へんじ事はなく吐とい息き
おりく折おり々に太ふとく身みうご動ごきもせず仰あほのき向まふしたる心こころ根ねの愁つらさ、其その身みに
りきなつてもお力りきが事ことの忘わすれられぬが、十ねん年ねんつれそふて子こ供どもまで儲もけ
わし我われに心こころかぎりの辛くろ苦ろをさせ、子こには檻ぼろ樓ろを下さげさせ家いえとて
じようは二じ疊よう一ま間の此こ様んな犬いぬ小こ屋や、世せ間けん一たい體たいから馬ば鹿かにされ別べつ物ものに
はるされて、よしや春はる秋あきの彼ひが岸んが來くればとて、隣となり近きん處じよに牡ぼ丹たも
だんごち團だん子ごと配くり歩あるく中なかを、源げん七しちが家いえへは遣やらぬが能よい、返へん禮れいが氣き
どくの毒どくなとて、心しん切せつかは知しらねど十けん軒けん長なが屋やの一けん軒けんは除のけ物もの、男おとこは
そとで外そと出でがちなればいさゝか心こころに懸かるまじけれど女をんな心こころには遣やる瀬せ
せつのなきほど切せつなく悲かなしく、おのづと肩かた身みせばまりて朝てう夕せきの挨あい

撈つも人の目色めいろを見るやうなる情なさけなき思おもひもするを、其それをば思おも

 はで我わが情婦こひの上うへばかりを思おもひつゞけ、無情つれなき人の心こころの底そこが夫そ

 ほどまでに戀こひしいか、晝ひるも夢ゆめに見みて獨ひとごと言ことにいふ情なさけなき、女にようほ

 房うの事ことも子この事ことも忘わすれはて、お力りき一人ひとりに命いのちをも遣やる心こころか、淺あさま

 しい口惜くちをしい愁つらい人ひとと思おもふに中なか々く言葉ことばは出いでずして恨うらみの露つゆを

 目めの中うちにふくみぬ。

物ものいはねば狭せまき家いえの内うちも何なんとなくうら淋さびしく、くれゆく空そらのたど

 くしきに裏屋うらやはまして薄うすく、燈火あかりをつけて蚊遣かやりふすべて、

 お初はつは心こころ細ほそく戸との外そとをながむれば、いそくと歸かへり來くる太たきち

 吉郎らうの姿すがた、何なにやらん大おほ袋ぶくろを兩手りやうてに抱かへて母かさん母かさんこ

 れを貰もらつて來きたと莞爾にっことして驅かけ込こむに、見みれば新開しんかいの日ひの出で

やがかすていら、おや此様な好いお菓子くわしを誰れだに貰つて來たもち、よくお禮れいを言つたかと問へば、あゝ能くお辭義じぎをして貰つて來たもち、これは菊きくの井みの鬼おに姉ねへさんが呉れたのと言ふ、母は顔色かほいろをかへて圖太づぶとい奴やつめが是れほどの淵ふちに投げ込んで未だまいぢめ方かたが足りぬと思ふか、現在げんざいの子こを使つかひに父とさんの心こころを動かしに遣し居るよこ、何なんといふて遣したよこと言へば、表おもて通りどほの賑にぎやかな處ところに遊んで居あそたらば何處どこのか伯父おぢさんと一處しよに來て、菓子くわしを買つてやるから一處しよにお出いでといつて、我おらは入いらぬと言つたけれど抱だいて行つて買かつて呉れたく、喰たべては悪わるいかへと流石さすがに母はの心こころを斗はりかね、顔かほをのぞいて猶豫ゆうよするに、あゝ年としがゆかぬと何なんたら譯わけの分わからぬ子こぞ、あの姉ねへさんは鬼おにではないか、父とさんを怠惰なまけもの者ものにした鬼おにでは

ないか、お前まへの衣類べいりのなくなつたも、お前まへの家うちのなくなつたも皆みな
 あの鬼おにめがした仕事しごと、喰くらひついても飽あき足たらぬ悪魔あくまにお菓子くわしを貰もら
 つた喰たべても能いいかと聞きくだけが情なさけない、汚きたない穢むさい此こん様な菓子くわし、
 家うちへ置おくのも腹はらがたつ、捨すてて仕舞しまい、捨すててお仕舞しまい、お前まへは惜をしく
 て捨すてられないか、馬鹿野郎ばかやらうめと罵のゝしりながら袋ふくろをつかんで裏うらの空あ
 地きちへ投なげいせば、紙かみは破やぶれて轉まろび出でる菓子くわしの、竹たけのあら垣打がきうちこえて
 溝どぶの中なかに落おちこ込むめり、源七げんはむくりと起おきてお初はつと一こそ聲おほ大きくい
 ふに何なにか御用ごようかよ、尻目しりめにかけて振ふりむかふともせぬ横よこ顔がほを睨にら
 で、能いか加減かげんに人ひとを馬鹿ばかにしろ、黙だまつて居ゐれば能いか事ことにして悪あくこ
 口雜くさうごん言ごんは何なんの事ことだ、知しつたひと人ひとなら菓子くわし子ご位らい子ご供どもにくれるに不ふ
 思議しぎもなく、貰もらふたとて何なにが悪わるい、馬鹿野郎ばかやらう呼よはりは太吉たきちをか

こつけに我れへの當こすり、子に向つて父親の讒訴をいふ女
房氣質を誰れが教へた、お力が鬼なら手前は魔王、商賈人のだ
ましは知れて居れど、妻たる身の不貞腐れをいふて濟むと思ふか、
どかた土方をせうが車を引かうが亭主は亭主の權がある、氣に入ら
ぬ奴を家には置かぬ、何處へなりとも出てゆけ、出てゆけ、面
白くもない女郎めと叱りつけられて、夫れはお前無理だ、邪推
が過る、何しにお前に當つけよう、この子が餘り分らぬと、お
りきしかた力の仕方が憎くらしさに思ひあまつて言つた事を、とツこに取
て出てゆけとまでは慘う御座んす、家の爲をおもへばこそ氣に入
らぬ事を言ひもする、家を出るほどなら此様な貧乏世帯の苦
勞をば忍んでは居ませぬと泣くに貧乏世帯に飽きがきたなら

かつて何處なり行つて貰はう、手前が居ぬからとて乞食にもなる
 まじく太吉が手足の延ばされぬ事はなし、明けても暮れても我れ
 が店おろしかお力への妬み、つくづく聞き飽きてもう厭やに成つ
 た、貴様が出ずば何ら道同じ事をしくもない九尺二間、我れが小
 僧を連れて出やう、さうならば十分に我鳴り立る都合もよからう、
 さあ貴様が行くか、我れが出ようかと烈しく言はれて、お前はそ
 んなら眞實に私を離縁する心かへ、知れた事よと例の源七にはあ
 らざりき。

お初は口惜しく悲しく情なく、口も利かれぬほど込上る涙を呑
 込んで、これは私が悪う御座んした、堪忍をして下され、お力
 が親切で志して呉れたものを捨て仕舞つたは重々悪う御座い

ました、成程お力を鬼といふたから私は魔王で御座んせう、モ
 ウいひませぬ、モウいひませぬ、決してお力の事につきて此後と
 やかく言ひませぬ、蔭の噂しますまい故離縁だけは堪忍して下
 され、改めて言ふまでは無けれど私には親もなし兄弟もなし、
 差配の伯父さんを仲人なり里なりに立て、來た者なれば、離縁
 されての行き處とはありません、何うぞ堪忍して置いて下さ
 れ、私は憎くかろうと此子に免じて置いて下され、謝りますとて
 手を突いて泣けども、イヤ何うしても置かれぬとて其後は物言は
 ず壁に向ひてお初が言葉は耳に入らぬ體、これほど邪慳の人で
 はなかりしをと女房あきれて、女に魂を奪はるれば是れほど
 までも淺ましくなる物か、女房が歎きは更なり、遂ひには可

愛わき子こをも餓うへ死じさせるかも知しれぬ人ひと、今いま詫わびたからとて甲か斐ひは
 なしと覺かく悟ごして、太た吉きち、太た吉きちと傍そばへ呼よんで、お前まへは父ととさんの傍そばと
 母かさんと何ど處ちが好いい、言いふて見みると言いはれて、我おいらはお父とつさんは
 嫌きらい、何なんにも買かつて呉くれない物ものと眞ま正つ直しをいふに、そんなら
 母かさんの行ゆく處ところへ何ど處どこへも一し處よに行ゆく氣きかへ、あゝ行ゆくともとて
 何なんとも思おもはぬ様やう子すに、お前まへさんお聞ききか、太た吉きちは私わたしにつくといひ
 まする、男をとこの子こなればお前まへも欲ほしからうけれど此この子こはお前まへの手てに
 は置おかれぬ、何ど處どこまでも私わたしが貰もらつて連つれて行ゆきます、よう御ご座ざん
 すか貰もらひまするといふに、勝か手たにしる、子こも何なにも入いらぬ、連つれて
 行ゆき度たくば何ど處どこへでも連つれて行ゆけ、家うちも道だう具ぐも何なにも入いらぬ、何どうな
 りともしるとて寐ね轉ころびしまゝ振ふ向むかんとせぬに、何なんの家うちも道だう具ぐも

無ない癖くせに勝手かつてにしるもないもの、これから身み一つになつて仕したい
 まゝの道だうらく樂ななり何なになりお盡つくしなされ、最もういくら此子このこを欲ほしい
 と言いつても返かへす事ことでは御座ござんせぬぞ、返かへしはしませぬぞと念ねんを押お
 して、押入おしいれ探さぐつて何なにやらの小風呂敷こぶろしき取出とりし、これは此子このこの
 寐間着ねまきの袷あはせ、はらがけと三尺じやくだけ貰もらつて行ゆきまする、御酒ごしゆの上うへとい
 ふでもななければ、醒さめての思案しあんもありますまいけれど、よく考かんがへ
 て見みて下くだされ、たとへ何どのやうな貧苦ひんくの中なかでも二人ふたり双そろつて育そだてる
 子は長ちやうじや者くらの暮くらしといひまする、別わかれば片親かたおや、何なににつけて
 不憫ふびんなは此子このことお思おもひなさらぬか、あゝ腸はらはたが腐さつた人は子この可愛かあい
 さも分わかりはすまい、もうお別わかれ申まますと風呂敷ふろしきさげて表おもてへ出いづれば、
 早はやくゆけくとて呼よびかへしては呉くれざりし。

魂たま祭り過ぎて幾いくじつ日、まだ盆ぼん提ち燈とうちんのかげ薄うす淋さびしき頃ころ、新しん

開かいの町まちを出いでし棺くわん二つあり、一つは駕かごにて一つはさし擔かつぎにて、

駕かごは菊きくの井いの隱いん居きよ處よよりしのびやかに出いでぬ、大おほ路ぢに見みる人ひとのひ

そめくを聞きけば、彼あの子こもとんだ運うんのわるい詰つまらぬ奴やつに見み込こまれて

可愛かあいさうな事ことをしたといへば、イヤあれは得とく心しんづくだと言いひま

する、あの日ひの夕ゆふ暮ぐれ、お寺てらの山やまで二人ふたり立たちばなしをして居ゐたとい

ふ確たしかな證しょう人にんもござります、女をんなも逆のぼせ居ゐた男をとこの事ことなれば義ぎ

理りにせまつて遣やつたので御ご座ざろといふもあり、何なんのあの阿あ魔まが義ぎ

理はりを知らうぞ湯屋の歸りに男に逢ふたれば、流石に振はなし
 て逃る事もならず、一處に歩いて話しはしても居たらうなれど、
 切られたは後袈裟、頬先のかすり疵、頭筋の突疵など色
 々あれども、たしかに逃げる處を遣られたに相違ない、引かへ
 て男は美事な切腹、蒲團やの時代から左のみの男と思はなんだ
 があれこそは死花、ゑらさうに見えたといふ、何にしる菊の井
 は大損であらう、彼の子には結構な旦那がついた筈、取にが
 しては残念であらうと人の愁ひを串談に思ふものもあり、
 諸説みだれて取止めたる事なけれど、恨は長し人魂か何かし
 らず筋を引く光り物のお寺の山といふ小高き處より、折ふし飛べ
 るを見し者ありと傳へぬ

(終)

青空文庫情報

底本：「文藝俱樂部第九編」博文館

1895（明治28）年9月20日

初出：「文藝俱樂部第九編」博文館

1895（明治28）年9月20日

※初出時の署名は、「一葉女史」です。

※変体仮名は、通常の仮名で入力しました。

※清音、濁音の表記の混在は、底本通りです。

※「悪《わ》るい」と「悪《わる》い」、「商買」と「商賣」、

「夫《それ》」と「夫《そ》れ」、「眞實《しん》」と「眞實

《ほんとう》、「成《な》り」と「成《なり》」、「嫌《いや》」と「嫌《い》や」、「下坐敷」と「下座敷」、「其様《そん》」と「其様《そのやう》」、「愁《つ》らき」と「愁《つら》さ」、「氣違《きちが》ひ」と「氣違《きちがひ》」、「中座」と「中坐」、「女房」に対するルビの「にようぼう」と「にようぼ」、「女」に対するルビの「をんな」と「おんな」、「頭痛」に対するルビの「づつう」と「づゝう」、「結城」に対するルビの「ゆふき」と「ゆうき」、「折」に対するルビの「おり」と「をり」、「鬼」に対するルビの「おに」と「をに」の混在は底本通りです。

入力：万波通彦

校正：岡村和彦、日高直哉

2016年4月20日作成

2016年5月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

にごりえ

樋口一葉

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>